

目次

まえがき

高橋一雄

9

第一部 数学を学ぶ、非行少年の姿

高橋一雄

プロローグ 五十の瞳——突き刺す視線

12

第一章 少年院との出会い

15

全国の少年矯正施設に連絡する／赤城少年院の村尾院長から連絡がくる／
数学者・数学教育者、瀬山士郎先生との出会い／授業を見学し、怒る私

第二章 少年院のさまざまな風景

25

授業を通じて知った、約束事／授業を行うについての四つの心構え／
少年たちとの三つの約束／数学の授業風景／瀬山先生が口火を切る／

数学の本質を一緒に考える／数学用語で語れるようにする／
黒板で問題を解かせる／ある裁判官の言葉——自分の言葉で説明させる／
少年院の中学校卒業式／出院式の風景

第三章 私が出会った少年たち

「うっせーんだよ！ ほっとけよ！」／授業中に殴ったと訴えられる、私／
「楽しんで金を稼げる方法を知っているから」／
「俺、小学校の六年間、学校では一日中テレビを見ていたんです」／
「少年院送りにした裁判官を後悔させてやる」／学力は生きる力である／
居場所を探す

第四章 調査・統計から見えてくる、少年たちの学力・学習に対する想い

少年たちの入院時の学力／入院少年の最終学歴と学校生活（不登校）／
入院少年の学習意識／矯正教育における学力不足を起因とする課題／
抽象的思考から、「介入群（集団授業）」と「対照群（補習授業）」との学力比較／

「介入群（集団授業）」と「対照群（補習授業）」との学習意識の比較

第五章 入院少年が必要とする教科指導とは

生活指導と教科指導との有機的連携／職業指導と教科指導との有機的連携／
「心の扉」は開かれる

112

第Ⅱ部 矯正教育における数学教育の意義

瀬山士郎

第一章 矯正教育との出会い

初めて少年院の門をくぐって／
少年院での数学教育と村尾院長、高橋一雄氏との討議／
もうひとつの教育現場

138

第二章 数学を学ぶということ

抽象的に考える／論理的に考える／記号化して考える／数学は難しい？／

151

日常経験からの離陸／「できる」と「分かる」の関係／

数学で想像力を解放しよう／

日常生活で使わないものは本当に学ぶ必要がないのだろうか

第三章 数学教育が矯正教育でできること

小・中学校での数学の知識を中学生、高校生として見直すこと／

方程式の授業を通して論理性を育てること／

記号操作を通して抽象的な概念を理解できる心を育てること／

思考の記号化で考えの跡をたどろう／

解けたうれしさと少年たちのプライドについて／

少年院での教育の特殊性の確認／法務教官と教科教育の関係／まとめにかえて

コラム1 分数とはどういう数か 185

コラム2 分数のわり算の計算 185

コラム3 一次方程式を解くということ 195

コラム4 二次方程式の解の公式について 203

第Ⅲ部 「矯正教育の意義」および「少年の姿と現場の苦悩」

村尾博司

第一章 少年院とは

216

少年院の少年たちの素顔／心の壁で見えにくい非行少年／

少年院は甘やかしの場なのか／育て直しと甦りの場所／支えなくして自立なし

第二章 少年院でどういった教育がなされているか

230

非行の背景にある「生活習慣病」への対処／全人格教育としての矯正教育／

矯正教育という家の構造——ひとつの土台と四つの柱

第三章 教科指導における数学教育の取り組みとその意義

240

教科指導の現状と宿命的課題／なぜ数学に着目したのか／

数学が敵でなくなった私の個人的体験／IQだけで学力を決められるのか／

学力とは学ぶ能力なのだ／目を輝かせる授業／

高橋先生・瀬山先生による驚きの教え／

オリジナル検定テストから生まれた小さな自信／

楽しくて、難しくて、うれしくて／高認試験への挑戦

第四章 少年院における基礎学力の現在地とその行方

自己効力感の向上こそ生きる力／社会復帰後、ふたつの課題／

社会という航海を続ける上で必要なこと／

今後の少年院に求める期待と支援者の役割

あとがき

村尾博司

280

イラスト／田中恭子

章扉・図版作成／MOTHER

264

私は数学教育に関わり三十年近くなりますが、後半以降、この十年間は数学教育者の瀬山士郎氏（群馬大学名誉教授）と共に、数学を通して少年院での矯正教育に関わってきました。

初めて瀬山先生と赤城^{あかぎ}少年院（群馬県）を訪れたとき、先生は「足元で教育から置き忘れられた少年がいることを知らなかった」と言われ、これは教育者にとって重い言葉です。

少年院では十八、十九歳の少年を中心に、数学教育を通して「自分もやればできるのだ」という自信と「生きる力」としての学力の習得をお手伝いしています。当初、少年院での矯正教育において、教科指導の重要性は理解されていないとの印象でした。しかし、少年たちは数学を学ぶ中で、確実に成長していきます。そこで今回、数学を通して、矯正教育における教科指導の意義と望ましい在り方について三部構成でお伝えしたいと考えています。

第Ⅰ部では、私の大学院での調査研究に基づく、数学を通して変容する少年の姿。第Ⅱ部では、瀬山士郎氏による矯正教育における数学教育の意義。そして、第Ⅲ部では、長年複数の少年院院長を務められた村尾博司氏による、現場からの矯正教育の現状と今後の課題。このよう

に外部と内部の視点から、現在の少年院および今後の少年院における矯正教育のあるべき姿が書かれています。また、閉ざされた少年院において、外部の人間として、ここまで少年たちと深く関わった者はいないと思います。よって、この本に書かれた彼らの素の姿、および変容の様子を通じて、学び成長する可能性について感じ取って頂ければ幸いです。

二〇二二年三月、この本が書店に並んだ翌月（四月）に民法改正により成人年齢が引き下げられ、十八、十九歳も「成人」となります。当然、少年法にも改正が加わりますが、十八、十九歳は「特定少年」と位置づけられ、引き続き少年法が適用され保護されることとなります。ただし、この措置も施行から五年後に制度の見直しがされます。この点に関して、著者である我々三人は、大変危惧しています。

そこでお願ひがあります。現在、世間では「特定少年」の位置づけをなくし、すぐにでも成人として扱うことを要求する空気があります。それを踏まえた上で、この本を読んだ後、ぜひ法学者である廣瀬健二氏の『少年法入門』（岩波新書）を読んで頂きたいのです。平易な文章で客観的視点から、丁寧に少年法の将来について語られています。

二〇二二年三月

第I部 数学を学ぶ、非行少年の姿

高橋一雄



プロローグ 五十の瞳——突き刺す視線

少年院の授業出席者の多くが、心を閉ざしている。

北海道家庭学校（児童自立支援施設）五代校長・谷昌恒氏の言葉をご紹介します。

「心の扉には取っ手は内側にしか付いていません。外側には取っ手がありません」^①

少年の「心の扉」を開くのは難しい。どうしたらこの扉が開けられるのか。

「眼は心の窓」と言われるように、入院間もない少年の眼つきは鋭く、怖さを感じる。

少年院で指導を始めて五年が過ぎた頃のこと。日本海側のある少年院で十八、十九歳の少年を対象にした高等学校卒業程度認定試験（旧大学入学資格検定、以下、高認試験）対策講座を担当することになった。少年院での指導は、常に数学者・数学教育者の瀬山士郎先生とふたりで行っていたが、このときは先生のご都合から、その後一年間、私ひとりで行った。授業をすることに。

授業の初日（二〇一六年六月）、今までにない緊張感の中、ひとり、幾重にも施錠されたドア

をくぐり、鉄格子のはめられた窓のある長い廊下を渡り、職業指導の陶芸の部屋を横目に階段をあがり、二階奥の教室へ。ただ、そこは学校の教室とは違い、集会場のような広い多目的ホールのような空間。入室するとすぐに教室前後のドアは施錠され、私は法務教官に言われるまま、少年たちの前に立つ。目の前には、机が一行五人で横に五列配置され、少年たちは背筋をまっすぐに伸ばし、手はグーに結び膝の上に置き、正面を向き静かに私が現れるのを待っていました。

このときまでの五年間、少年院での授業対象者は中学生であり、それゆえ少年に反抗的態度などをされても、怖いと思つたことは一度もない。ただ、今回は対象者が違い、現在、改正少年法での扱いで議論となつている「特定少年」と呼ばれる十八、十九歳の少年。さらに、彼らの多くは入院して一、二ヶ月を過ぎた時期なのでまだまだ眼つきは鋭く、その「五十の瞳」の視線が、私一点に向けられている。

私は（カラ）元気に「おはようございます！」と大きな声で挨拶をし、自己紹介および、今回の授業の目的と内容に関して話をしました。

すると、すぐに何か鋭い視線を感じるので。今までこんなにもはっきりと視線を感じたことはなく。ふと、私が視線を向けると、一番前の席に座っている、上着の袖口から見える両手にはいっばいに青色の絵が描かれ、ガタイ（体格）がよく、頭は坊主に近い、絶対以外で会っ

たら避けてしまうようなオーラを出している少年と目が合ったのです。そのとき、「何でコイツを一番前の席に座らせたのか？」と、教官を恨みました。でも、「怖いから」との理由で席替えをお願いするわけにもいかず……。その後もしばらくの間、彼は、（教官に注意されるまではないが）確かに私を威圧するかのような姿勢で授業を受けていました。それからしばらくして、個別指導のとき、彼から「先生、俺たちきつとすれ違っていましたよね！」と。さて、この言葉の意味は……。